

アルベルト・ジャコメッティにおける「宙吊り」の問題

藤本 玲 (筑波大学)

1930年代にアルベルト・ジャコメッティ (1901-1966) がパリで制作した彫刻作品の多くは、当時の芸術家達との関わりから、「シュルレアリスム期」として位置づけられる。中でも30年4月に発表された『吊るされた球』(Boule suspendue 1930-31)は、後にブルトンによって買い上げられ、彼の死までアトリエの壁の中央に置かれていた。また、ダリがこの作品を「象徴的作用のためのオブジェ」と呼び、「欲望とエロティックな幻想を引き出す」と表現したことにより、当時のシュルリアリスト達のフロイト的な見方を助長することになった。この作品の特質が形体にあることは明らかであるが、先行研究の中で与えられてきた解釈は大きく二つに分けられる。まず一つ目はシュルレアリスムの基本原理に基づく、「欲望」の隠喩的解釈であり、二つ目はロザリンド・クラウスによる、ラカンやバタイユの理論に基づいた、作品の「形式」に焦点を合わせた構造的解釈である。クラウスがこの作品を「構造的機能」を引き出す「装置」として位置づけ、さらに「動的性質」を提示した点は、ジャコメッティ自身が「動き」を自らの作品の本質として考えていた事実をふまえる限りにおいては、妥当なことだと思われる。

しかしながら、クラウスが明るみに出すこの構造は、作品という形態の安定性を根底から揺さぶりながらも、最終的には「無意識の完全な構造化」として、「装置」というまた別の意味形式に吸収されてしまい、作品という「全体の経験」を考えるには不十分であると発表者は考える。確かにこのようなアプローチは作品の隠喩的關係やカテゴリーを超えることを許すが、まさにその理論の堅固さ故に、既成のイメージや概念の破壊を目的とする構造へと翻訳されてしまう。クラウスは彼女自身がこの作品を前にしたときの、自らの経験、「全体としては玩具のように穏やかに単純な構成」についての分析を、全くといっていいほど行っていない。つまり装置を「作動」させるための行為、すなわち作品を前にした時の、知覚の次元において循環的に機能する現象について目を向けておらず、その次元での作品の探求は概念の枠外に追いやられていることになる。

そこで本発表では、作品の「宙吊り」という形式と機能に改めて着目し、まず作品を、構造を含む微細な「行為」に置き換え、それらの生起の仕方そのものについて問うことを試みる。そのための手続きとしてまず先行研究を簡単に概観しつつ、この構造がジャコメッティの「シュルレアリスム期」の作品だけに特異なのではなく、晩年の作品に至るまで持続的に生起し続ける構造であることを示唆したい。それはこの作品の性的な解釈についてジャコメッティ自身が適切な説明を欠く理由も明らかにするはずである。そしてこの構造が、どのように他の作品の中で反復され、行為として現れていくのかを検証し、その意義を考察したい。